

＜＜授業実践報告＞＞

領域「表現」の観点からみた「身近な環境と十分にかかわる」ことの意味理解 －保育内容研究Ⅴ（表現 A）前期授業からの考察－

遠藤 知里 森 広樹 田村 元延 花岡 清美 木下 藍 加藤 明代

1. はじめに

1.1. 授業実践を評価する（振り返り考察する）ことの意味

授業実践記録を、授業者・学生・第三者で共有する機会を持つことは、各々の実践の深化発展や新たな気づきの生成につながる。本報告では、幼稚園教育要領の領域「表現」の内容の取り扱い1として記載がある「豊かな感性は、身近な環境と十分に関わる中で美しいもの、優れたもの、心を動かす出来事などに会い、そこから得た感動を他の幼児や教師と共有し、様々に表現することなどを通して養われるようにすること」を出発点として、5領域の連関や相互性を意識した授業実践をふりかえり、学生が授業の中で「身近な環境に十分にかかわる」ことについての意味理解を試みたい。

1.2. 身近な環境と十分にかかわること－自然×ひと×ひとが生み出すもの

現行の幼稚園教育要領の内容の取り扱い1に、以下の記載がある。

- (1) 豊かな感性は、身近な環境と十分に関わる中で美しいもの、優れたもの、心を動かす出来事などに会い、そこから得た感動を他の幼児や教師と共有し、様々に表現することなどを通して養われるようにすること。その際、風の音や雨の音、身近にある草や花の形や色など自然の中にある音、形、色などに気付くようにすること。

この記述を参照しつつ2019年度前期の授業計画を振り返ると、以下の点について学生が体験的に学べるように構成されていたものと捉え直すことができた。

1. 身近な環境と十分にかかわる

- ・光、水、土、風、植物、生き物、風景等、普遍的に存在する自然との関わりを持つ。
- ・地域の中でイメージが伝承共有されてきた、誰でも知っている身近な子どもの文化財との関わりを持つ（わらべうた、伝承あそび、草花あそび、言い伝えや昔話等）。
- ・心を弾ませたり和ませたりするような、光・色彩や音楽がある環境との関わりを持つ。

2. 心が動いたことをひとりひとりが表現し相互に受け止め合う

- ・表現し相互に伝え合う・受け止め合うことで自分とは異なる感性があることを知る。
- ・表現を他者に受け止めてもらうことによって感動の意味を明確にする。

3. 教師自身が楽しんでいる姿の影響力を知る

- ・表現を楽しむ教師の姿を学生が目当たりし、やってみたいという思いを持つ。
- ・教師が学生に向かって表現すること、伝え合うことで、学生と感性の交流を持つ。

2. 授業実践と評価

2.1. 授業計画

本報告で取り上げる授業計画の概要を表1に示した。授業構成上の工夫は、「同じ設定での授業が2回ある」、「同じ構造になっている授業構成が2回ある」など、同じ内容や構造を再度体験できる機会を意図的に設けていることである。

また、今年度の新しい試みとして、附属幼稚園の子どもの姿の写真や動画を、授業の冒頭で随時紹介し、授業の主題と関連づけて理解を深められるようにした。

表1 授業計画の概要

授業日程		主 題	内 容
1	4月9日	春の〇〇〇	自然に触れながら新しい仲間の中に居場所をつくる ・キャンパスの庭やキャンパス近隣の自然に触れる ・キャンパス近隣や県立大学広場への散歩 ・振り返りをグループの仲間4名と共有する。
2	4月16日		
3	4月28日	自然に親しむ	「自然物を介した自己表現」「自然な流れでの自己表現」 ・水、土、風、光、身体のコナーを毎回設置し、春らしい空気感の中で、やってみたいことを自由に試し楽しむ。 水：色水、せっけん 土：たね、スコップ、植物 風・光：透明シート、不織布、油性マジック 身体：わらべうた、ゴムとび、なわとび
4	5月7日		・他者の活動を見て、やってみたいという気持ちを持つ。 ・戸外活動を計画していても「雨が降る」ということを知る。 ※雨天時は、雨の日のあそび（うた、折り紙他）を楽しむ。
5	5月14日		
6	5月21日	ドキュメンテーション (学生が作成)	ドキュメンテーションの作成（ドキュメンタガミ） ・「他者に伝える」手紙のイメージで活動をまとめる。
7	5月28日	まとめとふりかえり	ドキュメンテーションを相互に見合う 教員の講義
8	6月5日	カップ プロジェクト	チケット・デー（かっぱ師匠） ・教師（かっぱ師匠）が構成する活動に参加し表現を楽しむ。
9	6月11日		プロジェクト（かっぱの町内会） ・教師はドキュメンテーションを作成する（6月18日）。 ・町内会的大グループ（40名）のゆるやかなつながりの中で、教師とともに、個人や新しく出会った仲間どうしでやってみたい活動を見つけて自由に楽しむ。 ・教師作成の活動アイデア集「カップ・カード」をヒントに、表現活動のイメージをふくらませて楽しむ。自由に試す。
10	6月18日		
11	6月25日	ドキュメンテーション (教師が作成)	カップ・ファミリーデー（かっぱ家族の生業） ・教師はドキュメンテーションを作成する（6月25日）。 ・家族的小グループ（2名～10名程度）のつながりの中で、「生業（なりわい）」を「祭りに出店する」という設定で、他者と共に楽しめる表現活動を計画する。 ・教師が創造的に楽しむ姿（河童の音頭、ほか）に触れる。
12	7月2日		
13	7月9日		カップカーニバル（かっぱのおじゃまつり） ・出店形式で「祭り」を楽しむ。 ・「おじゃましあう（相互に参加しあう）」ことで、自分とは異なる他者の感性を受け止め、共に楽しむ。
14	7月16日	ドキュメンテーション (学生が作成)	ドキュメンテーションの作成 ・前期の活動を振り返りドキュメンテーションを作成する。
15	7月25日	まとめとふりかえり	ドキュメンテーションを相互に見合う 教員の講義

2.2. 春の〇〇〇（散歩）

2.2.1. 活動のねらい

授業の初回と2回目にわたって、「自由な雰囲気の中で、ひとりひとりの居場所を作る」、「同じクラスの学生以外とも気持ちよく交流し表現活動に取り組む」ことを意図して、ライフデザイン総合セミナーのグループ（20名）を5分割した4人組小グループ（A組、B組、C組、D組、各1名ずつ含まれるようにという条件で自由に4人組を作る）での活動を行った。また、学生同士が自然に他者の振り返り内容に目を向けることを期待し、共同作業となるような振り返りの方法を指定した。



写真1 春のハイキング

2.2.2. 授業者の気づき

1) 居場所ではできたのか

「全員に居場所を作る」という意図のもと、小グループ編成の方法について、「方法を指定し、それに沿って自由に決める（教員側が全部決めずに学生の自由を残す）」を試みた。また、「初めて出会った相手と（1週間後に待ち合わせて）ハイキングに出掛ける」という、やや難易度が高いと思われる課題を設定した。これらの活動を通して、「拠り所となる枠組み（例えばグループの決め方や課題の内容を指定する）」を工夫すれば、学生は自ら活動をすすめていくことが出来る、という気づきがあった。

2) 不確実性をおもしろがり楽しむ構えの醸成

短大保育科に入学し、学生は期待に胸を膨らませていると同時に「どんな授業なんだろう？次は何が起こるのだろう？知らない人と一緒にいったい何をするのだろう？」と先の不確実性に不安を抱えている。その不安の最大の原因は「ひとりひとり考えていることが違う」、「そのことに起因するわかりあえなさ」ということであろう。

その不確実性を憂鬱で重たいものと捉えず、むしろおもしろいと感じられるような相互の関係性を醸成することが、本授業がめざす表現の原点や本質の理解につながるものと考えたい。

2.3. 自然に親しむ

2.3.1. 活動のねらい

春の自然（草花等の素材、色彩を生み輝かせる日光、暖かく爽やかな空気感など）の快さ・心地よさを感じ心が動く自分自身を体感する」、「自分で好きな活動を見つけて取り組む」、「他者と共に行うことの楽しさに気づく」ことを意図して、3回連続で戸外でのコーナー活動を計画した。キャンパスの庭に「水」、「土」、「風・光」、「身体」のコーナーを設定し、それぞれに素材や道具を設置した。素材や道具は、過去の表現A授業において学生が実際に行っていた活動を思い起こして設定した。以下、準備した道具・素材等とそれを使って展開するであろうと授業者が事前に想像した活動を併せて示す。

水：ガラスのコップ・ワイングラス（グラスハープ、水を入れて叩き音を楽しむ、飲み物づくり）、食用色素（透明感のある色水の美しさや色つきの影を楽しむ）、石けん（さまざまな泡の生成過程や感触を楽しむ、クリーム等の食品に見立てて遊ぶ）、じょうろ（地面に水で絵を描く）、散水ホース

(虹を作る)、さまざまな容器、泡立て器、霧吹き、等。

土：スコップ（掘る、掘り出す、土を集める）、植物の種子・ポット・じょうろ（種を蒔く）、シロツメクサを摘んで花かんむりを作る、四つ葉のクローバーを見つける。

風・光：透明ビニール・油性マジック（ツルツルの感触を味わいながら絵を描いて楽しむ、光のあるところに吊して透ける色彩を楽しむ、風に揺らぐ様子を楽しむ、身にまとうことを楽しむ、風や水を溜めることを楽しむ、太陽光で出来る透け感のある影を楽しむ）、薄い不織布（風を集める、吊して風を見えるようにする、スクリーンのように吊して透ける風景や透けて写る影を楽しむ）、紙皿・紙コップ（風車をつくる）、はさみ、セロハンテープ類、すずらんテープ、針金、ストロー。

身体：幅広ゴムテープ（ゴム段をする、ステップ系のゴムとびをする、ゴムの伸縮を楽しむ）、なわ（なわとびをする、つなひきをする、地面に図形を描く、遊びに使う境界線を描く）



写真2 やりたいことを見つける

2.3.2. 授業者の気づき

1) やりたいことを見つける

自然環境という普遍性に加え、「生活の中に普遍的にあるモノ」に絞り込んだ物的環境で構成された環境の中で、さまざまな遊び方が生まれていた。モノが視野に入ること、他者のあそびが視野に入ることによって活動が伝播していくことに改めて気づかされた。

2) 雨が降るといふことー雨の日の特別な楽しさ

戸外での活動を計画する場合、雨天時の備えをしておくことが必要である。雨を戸外で直接感じ取る体験も重要であるし、戸外での活動を諦めて、雨を感じ取りながら屋内での活動を楽しむ体験も大切にしたい。「雨が降りやりたいことができなくて残念」ということが少ない日常の中で、「雨が降ったらどうするか」ということを計画の一部として備えておくことを教員が見せたり、学生自身が経験したりする機会は、意外と貴重であるかも知れない。



写真3 雨の日は室内で

2.4. カップ・プロジェクト

2.4.1. 活動のねらい

ここでは、段階的に発展していくような授業デザインを意識した。具体的には①チケットデー（教師が提供する構成的な活動）⇒②プロジェクト（自由に発想し試す時間）⇒③カップファミリーデー（他者に向けて形にしていく時間・チケットデーと同じ構造を学生自身が生み出すということ）⇒④カップ・

カーニバル（相互に訪問しあいみんなで楽しむ時間）であった。

また、子どもが創造的な活動をしているときに教師がどのようなまなざしを持ってその場に居るのかを知ってほしいと考え、教員4名がそれぞれの視点で学生の活動を見てドキュメンテーションを作り学生に示した。



写真4 カッパを見てきました

2.4.2. 授業者の気づき

1) 水面下で進行していることに目を向ける

試行錯誤が事物を通してなされていると、見ている教師は安心できる。しかし、活動が停滞しているように見えるときにも、教師には見えない部分での制作・創造が進んでいるという事実を理解することが大切である。また、アイデアを仲間と共有しながら具現化していくのが楽しいという人、他者が生み出した楽しい構造に加わっていくのが楽しいという人、いろいろな人がいる。さまざまなかわり方の創造的な価値にも気づくことができた。



2) 同じイメージを確実に共有できる手がかかり

カップカーニバルではきゅうりの店が人気を博し、多くの出店があった。意外な印象もあったが、「きゅうりを食べる」ことは誰もが経験しており、共通イメージがある。このことは、経験の共有、たとえばお互いによく知っているキャラクター（たとえばディズニーのキャラクター）から活動が始まることと同じような構造となっている。確実に共有できるという安心感は、人間関係を深めやすい。わかりあえないことを越えていくという方向とは逆であるが、この価値を認めていくことが大切であるようにも思う。

写真5 カップの生業(きゅうりの店)



写真 6 カッパカーニバルのポスター

2.5. ドキュメンテーションの作成（教師もつくる・学生もつくる）

2.5.1. 活動のねらい

授業の区切りで、写真を用いて活動をまとめたドキュメンテーションを作成した。

教員が作るドキュメンテーションは、授業時にプロジェクターで投影し、教員が言葉を添えた。このことによって、他のグループが何をしているのかを伝えると同時に、教師の視点を伝えた。また、学生が作るドキュメンテーション（ドキュメンテガミ、前期のドキュメンテーション）では、掲示しお互いに見合う時間を作り、同じ授業内において一人一人が異なる体験や異なる感じ方をしており、その表現方法が様々であることを知る機会とした。



2.5.2. 授業者の気づき

学生たちがドキュメンテーションを作成することに思った以上に時間がかかること、自分のドキュメンテーションを作ったら満足という事実があるということに気づいた。他者の表現への関心が広がらないことへの気づきは悩ましくもあったが、学生が相互に関心を持ち合うにはどうしたら良いかを考えるきっかけとなった。

他の授業との関連で、ドキュメンテーションやラーニングストーリーというものを理解している学生と、そうでない学生との間に、意味理解の差があった。しかし、理解の方法は多様であり、実際に保育現場で作成されている実物に触れることで、その隔たりを埋められる学生もいる。今年度は、附属幼稚園のドキュメンテーションを随時紹介した。附属幼稚園の実践が、学生の学びを深めることにつながれば嬉しく思う。



写真7 ドキュメンテーションを見合う

3. まとめ

3.1. 身近な環境と十分にかかわる…「ひと」と「自然」

前期の実践では、素朴な表現（それに先立って心が動くことを含む）を通して他者との間にゆるやかに生じること、すなわち「他者の表現をキャッチして内的イメージを持つ」ということが、他者との関係のあり方（関係性）に肯定的に作用するという気づきを得た。4月から5月の季節が持つ快い空気感や、自然物の快い感触が、内的なイメージの開放を afford し、他者との間に新たな関係性を創出し得たのではないかな。

3.2. 心が動いたことを表現し相互に受け止め合う

前期の実践では、「繰り返し試す」ことの重要性を再確認した。「私も」という動機は、他者と共通の体験を得る出発点となり、共通の体験は他者理解の出発点であるとも言えるのではないかな。他者の感性

に自分の感性が同調することを欲して共通の体験を求めるところに、人間の自然があるのかも知れない。

3.3. 教師自身が楽しんでいる姿の影響

前期の実践では、授業者に「学生の姿を丁寧に見ること」を求めたためか、教師（授業者）は学生の表現を受け止めることを重視していた。一方で、教師の表現を学生がどのように受け止めているのかを感じ取る視点も大切にしたい。教師として、自己の存在を受け止めてくれる相手の存在に気づき、受け止めること（他者を自己の中に受け入れること）と表すこと（自分を他者の中に入れていくこと）の相互性に対して敏感でありたい。



写真 8 教師もあらしを受け止めてもらえる存在である（その喜びを愛したい）

3.4. おわりに

表現系教員の多くが関与するこの科目は、「音楽（音楽表現）・図画工作（造形表現）・体育（身体表現）」の各分野が重なる「表現系ピアツア（広場）」である。教員にとっても、「異なる理解がある」ということを知る場であり、貴重な機会であることを再確認できた。

本稿が、本授業にかかわる学生、教員、学内外の関係者の目に触れ、さまざまな理解のあり方を交換しあうことによって、今後の授業内容の質向上（授業をよりおもしろくすること）につながると良いと思う。

引用文献

1) 幼稚園教育要領解説（平成 30 年改訂）

http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2018/04/25/1384661_3_3.pdf（2019 年 9 月 24 日検索）